

教学としての「新しい社会運動」論（下）

—— フェミニズム・女性運動 ——

小 野 一

A Memorandum for the Lecture on “New Social Movements” (3)

—— Feminism and Women’s Movements ——

Hajime ONO

Feminism brought about a cultural revolution: It made private problems into public concerns; it broke a neutrality-mistique of political systems and academism; it made some of our conventional values and life-styles old-fashioned. Because it proposes a potential resolution of difficulties in our time, not only women but also men are interested in it.

This paper, the third part of my lecture-note on “New Social Movements”, consists of four chapters: First, we survey especially the women’s liberation movements in the USA. In the second, we explain some keywords; gender, patriarchy and reproductive rights. In the third chapter, the main part of this paper, we describe the arguments of some schools; liberal, radical, Marxist and eco-feminism. Here, we would like to consider about mutual relations between ecology and feminism. In the last chapter, we refer to feminism in Japan.

人口の半分が経済・社会生活の諸局面で不利益を被っている状況は、是正されるべきである。だがフェミニズム運動の意義はそれだけだろうか。

フェミニズムにより、本来政治的論議にはなじまないとされたテーマが公共空間に持ち込まれ、学問のジェンダー中立性の神話にも疑問が投げかけられた。女性問題を突き詰めていくと、経済成長思考を相対化し現状をラディカルに問い直す視点が求められるが、これは時代の閉塞状況を打破する知的革命の可能性を胚胎する。その意味でフェミニズムは、人口の残り半分にとっても無関心ではいられないテーマである。

本来フェミニズム運動は具体的問題に即して活動してきたため、統一的な理論体系を見出しにくい。それを承知の上で本稿は、「新しい社会運動」に関する初学者向けの講義を想定し、フェミニズムの概説を試みた。戦後アメリカの女性運動を概観した後、フェミニズムの思想や問題状況を流派別に検討する。各種の社会運動の相互関係というテーマにも言及した

い。最後に、日本のフェミニズム運動についての考察を行う。

3.1. 運動としてのフェミニズム

3.1.1. 現代フェミニズム運動の源流

封建制を打破したヨーロッパの市民革命は、万人の自由と平等を基本原則として確認した。だがここで市民とはブルジョア白人男性であり、女性は政治的意思決定から排除されていた。婦人参政権を求める長い運動がここから始まる。初期の理論家メアリ・ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』(1792年)の中で、男女差別の不合理を批判し、女性の経済的独立が人格的自立の前提だとした。政治・経済における対等な法的権利の獲得が、「第一波」フェミニズムの目標である。この思潮は、近代理性主義の忠実な申し子であるジョン・スチュアート・ミルなど、リベラルな男性知識人の間にも理解者を得た⁽¹⁾。

婦人参政権は、欧米諸国では20世紀初頭までにおおむね実現された。これにより男女平等は達成されただろうか。答えは否である。政治の要職は圧倒的に男性が占めていたが、これを当事者の能力差のみに帰するのは正しくない。形式的な男女平等だけでは実質的平等は達成できない。それを妨げる「何か」がある。その原因を突き止めそれを克服するには、従来の「常識」を根本的に問い直すことが必要だった。

社会主義の女性解放論にもふれておく必要がある。資本主義の発達とともに、低廉な労働力として動員された女性や少年の劣悪な労働条件が大きな社会問題となった。それゆえ女性労働者の保護は、労働運動の重要な課題のひとつとなった。一般に労働運動は男性主導といわれるが、女性労働者の権利を一定程度勝ち取ってきたのも事実である。だが男性中心主義的な偏りはマルクス主義とて例外でなかった。これを批判的に継承したマルクス主義フェミニズムは、後にみるように多大な理論的貢献をなすのである。

3.1.2. 戦後アメリカ女性運動小史

本稿の中心は、「第二波」フェミニズムだが、その展開をアメリカを例として概観する⁽²⁾。

アメリカの60年代とは、公民権運動や新左翼運動の盛り上がりの中、自由、平等、少数派の権利といったことがアジェンダ化された時代である。黒人、ヒスパニック、アメリカインディアン、同性愛者、若者、貧困層、高齢者、障害者らは、それぞれの要求を掲げて行動した。従来、現状適応以外になすすべを知らなかった女性たちが自らのおかれた境遇を疑問視し始めたのも、こうした時代状況と無関係でない。彼女らの要求は、おおよそ次のように要約できる。同一労働同一賃金、雇用・昇進の差別撤廃、教育における機会均等、婚姻および離婚法制における差別・不利益の撤廃、銀行クレジットから健康保険まで、妻が夫に従属していることの是正。性役割や結婚・家族形態の見直しも目標とされた。

ケネディ大統領の下、男女差別を解消するための委員会が設立されたが、政治家たちには

さほど重視されなかった。66年、雇用機会均等委員会の発動を求める提案が拒否されると、女性委員の有志は独立組織の必要性を痛感する。こうして、初の全国組織として全米女性機構（National Organization for Women, 略称NOW⁽³⁾）が設立された。専門職の白人女性を幹部とする同組織は、国家委員会のミニチュア版のようなところがあり、当初は大衆的基盤を欠いていた。男女平等のために既存の立法措置を強化し雇用・教育における差別を廃絶すべく、政府に圧力をかけることを目的とした。

だがフェミニズム運動にはもうひとつの流れがあった。新しい社会運動の洗礼を受けた草の根の活動、すなわち日本では「ウーマンリブ」と怪しげな和製英語でよばれる運動である。女性たちは大学内外のコミュニティ活動で連帯感を強め、学習啓発サークルをつくり、フェミニスト書店、女性センター、シェルター、育児施設を運営したり、レイプや避妊・中絶などの問題に取り組んだ。ウーマンリブ運動は、大学や大都市といった拠点を越えて拡大したが、有色人種や労働者階級の女性の間にはあまり浸透しなかった。

70年代半ばまでに、フェミニズム運動はいくつかの具体的成果を獲得した。賃金差別への補償と管理職への女性の登用を約束したAT&T（電話会社）と雇用機会均等委員会との協約⁽⁴⁾（1972年）や、同年に一旦下院を通過し成立直前まで行ったE R A（Equal Rights Amendment：男女平等憲法修正条項）は、男女同権運動の盛り上がりを示すものである。YWCAなどの伝統的な女性組織はフェミニストの目標を取り入れ、政党も女性議員の進出を促す改革を行った。草の根で展開されていたシェルターなどの活動は公的サービスに取って代われ、女性学研究も大学の正規のカリキュラムに組み入れられた。

そうした成功ゆえにというべきか、「バックラッシュ」⁽⁵⁾とよばれる反フェミニズム運動も目立つようになった。その代表例がE R Aに対する反対運動である。反対派は共和党保守派、「新キリスト教右派」、「プロ・ライフ」などのシングルイシュー・グループの間にネットワークを形成し、いくつかの州での修正案批准拒否に成功した。世間では一部フェミニストのラディカルな要求に際し、伝統的家族の崩壊や同性愛の容認を危惧する向きがあったのである。保守的な女性は、男女平等は生物学的差異のゆえに不可能であり、望ましくもないと考えた。こうして、レーガン政権に象徴されるような新保守主義的傾向の中で、80年代以降のフェミニズム運動は守勢を余儀なくされた。

3.2. 基本概念

3.2.1. ジェンダー

「性」という場合、2種類の概念を区別する必要がある。ひとつは生物学的ないしは解剖学的差異を意味する「セックス」で、もうひとつは男女間の心理的、社会的、文化的差異としての「ジェンダー」である。多くの文化において男らしさ、女らしさの規範があり、これに基づく性役割分業がある。これらの価値規範は幼年期からの社会的学習を通じて後天的に獲

得されるもの、すなわちより多くジェンダーの領域に属するものである⁽⁶⁾。

ジェンダー・アイデンティティの形成について、有名だが問題の多い議論を展開したのは、心理学者フロイトである。彼によれば、幼児期におけるジェンダー学習はペニスの有無を軸に展開される。前エディプス期の男の子は、父親に去勢されるとの幻想から母親への愛情を断ち切り、自分を父親と同一化しようとする。こうして彼は、男性としてのアイデンティティに目覚めていく。それに対し女の子は、男の子のような外性器をもたないことから「ペニス羨望」に苦しむ。彼女にあっては、母親もペニスを欠くゆえ評価が下がる。こうして女の子は母親と同一化する際、自分を「二流の」存在として認知することで、従順な態度を引き継ぐ⁽⁷⁾。

この議論がフェミニストからの集中砲火を受けるのは当然のことである。女性器を男性器より劣ったものとするフロイトの議論は、男性優位主義そのものではないのか。鍛錬を課す者として重要なのは、父親よりもむしろ母親ではないのか。ペニスの有無という生物学的事実から男らしさ女らしさを演繹するのでは、セックスとジェンダーの区別がそもそも成り立たなくなるのではないのか。

ベティ・フリーダンはフロイトの業績を認めつつ、批判されるべきは、アメリカ女性の独立を妨げるためにフロイト理論に飛びつき、それを誤って解釈した人たちだとする⁽⁸⁾。男性中心主義的な既存の学問が通俗科学として流布するに際し、社会の言説状況を規定することがある。それを論破するためのパラダイム転換を通じ、フェミニズムはジェンダー概念を、男性優位主義批判の理論的武器として鍛え上げてきたわけである。

ジェンダーは他に、歴史学⁽⁹⁾やポストモダンの視角⁽¹⁰⁾からも分析される。

3.2.2. 家父長制

ミレットは『性の政治学』の中で、権力関係としての男女関係は、自然の生物学的現象に基づくのではなく、イデオロギー、教育、社会規範、男の暴力などによって社会的に作り出されると述べ⁽¹¹⁾、公私にわたる家父長制との闘いをフェミニズムの中心的課題とした。ファイアストーンは、女性の生殖機能ゆえの身体的拘束の中に男性優位社会の原因をみる。ミッチェルは精神分析を用いた家父長制分析を、経済的抑圧・不平等を分析する上で有益なマルクス主義に接合させようと試みた⁽¹²⁾。

家父長制(patriarchy)の概念化により、フェミニズムは男性中心主義的支配システムの全体像を表現する言葉を得た。形式的平等だけでは女性解放が実現しない理由を説明するカギのひとつが家父長制である。

3.2.3. リプロダクションと自己決定権

人間の生殖活動には著しく不平等な性別分業が存在する。男性優位はこうした生物学的事実からの必然的帰結だとする言説を否定するのに、フェミニズムは苦勞してきた。ボーヴォ

ワールは『第二の性』の中で、女性自身がコントロールし得ない生命懐胎機能を「種への従属」と表現し⁴³⁾、彼女の次世代のファイアストーンは合理的な生殖テクノロジーによる家父長制の解体を目指した⁴⁴⁾。だがこのように女性自らの生殖能力を無化するような方向性は、女性の生殖能力を低く評価してきた男性優位主義の論理を受け入れることであり、問題の根本的解決とはなり得ない⁴⁵⁾。女性は自らの生殖能力をどうとらえるか、妊娠・出産の自己決定権はどうあるべきかが、フェミニズムの重要なテーマとなる。

避妊や人工妊娠中絶はフェミニズムの伝統的テーマである。今日の先進国では、女性の自己決定権すなわちプロダクティブ・ライツは受け入れられる趨勢にあるが、保守派・宗教勢力からの抵抗も根強い⁴⁶⁾。そこに男性優位主義が潜んでいるのは事実だが、この問題は母子の健康や生命倫理ともかかわるデリケートな問題である。また今日の生命工学は人工受精や代理出産も可能にしており、それがビジネスや国家権力と結びつくと恐るべき人権侵害の危険がある⁴⁷⁾。リプロダクションをめぐる議論は、家父長制を超克する可能性を秘めるが、生命工学の発達とも相まって複雑な倫理的問題を突きつけられている。

3. 3. 思想としてのフェミニズム

3. 3. 1. 性の不平等の原因を探して

3. 3. 1. 1. リベラル・フェミニズムの意義と限界

全米女性機構（NOW）の創設者ベティ・フリーダン著『新しい女性の創造』（1963年）は、第二波フェミニズム運動の先導理論として大きな影響力をもったが、先駆者ゆえの弱点も免れていない。その意味でも、古典とよぶにふさわしい作品である。

1950年代のアメリカで喧伝された幸福な女性像は、郊外住宅で何不自由なく暮らす専業主婦だった。だがフリーダンがインタビューして回った主婦たちはそれとは異なり、得体の知れない憂鬱に悩まされて生きていた。高等教育を受けたにもかかわらず、郊外地の主婦としての生活では自らの才能を活かすチャンスなどなかったのである。

フリーダンは専業主婦を礼賛する議論に疑問を呈し、そこに男性優位主義の残滓を見て取る。その上で彼女は、女性が家庭の外で男性と同じように働くことが女性解放の前提であると説く。「もし、女性がかち得た教育を活用して、家の外で働くことに新しい生きがいを見出していれば、自動車や庭や日曜の大工仕事は男性の生活にとってつけ足しであるように、家事も女性にとってつけ足しにすぎなくなっていただろう」⁴⁸⁾。

この著作にはいくつかの問題点が内在している。まず運動論としてみた場合、射程範囲の限定性を指摘せざるを得ない。調査対象は郊外住宅に住む才能に恵まれた白人中産階級の主婦である。だが男女差別に苦しむのは、非白人女性、労働者階級の女性、貧困女性、何らかのハンデを負った女性、マイノリティ女性も同じである。彼女の議論では、ノンエリート的女性はどの程度考慮されただろうか。働かなければ生きていけない女性にしてみれば、「有意

義な」仕事から遠ざけられたストレスを過剰な家事や趣味で発散させるなど、贅沢な悩み以外の何ものでもない。実際、彼女の著作は黒人女性の間では評判が悪かった¹⁹⁾。確かにフリーデン自身は人種主義者ではなかったが、アメリカのフェミニズムの人種主義的バイアスは、しばしば指摘される。

また彼女の運動論は、女性解放の多様な立場を認めるものではない。何らかの理由で職業生活において男性なみのキャリア志向に徹し得ない女性は、否定的にしかとらえられない。これでは職業婦人と主婦の間に分断を作り出してしまふ。逆によりラディカルな要求に対し、彼女はオープンでなかった。例えばレズビアン²⁰⁾の要求などは彼女には組織分裂工作としか思えず²¹⁾、その貴重な問題提起を理解できなかった。

こうした弱点は、彼女の概念理解が今日の理論水準に照らして十分でないこととも関連している。家父長制と資本主義体制への適切な理解があれば、それほど単純な結論は導けないはずである。フロイト批判はわかるが、より重要なのは、通俗化された女性神話が受け入れられてしまう社会経済的要因を問うことではあるまいか。

ここにリベラル・フェミニズムの根本的な限界がある。リベラリズムの考え方によれば、社会は、政治や経済などのパブリックな領域と、家庭などのプライベートな領域に分かれる。このワク組みの中で女性解放を考えるなら、女性にパブリックな領域での活動の機会（婦人参政権など）を与えることが目標となる。だがこれだけでは不十分であり、プライベート領域をも視野に含んだ戦略が必要である。家庭という私的空間における男性家長の支配が、社会全体の権力関係を規定しているかもしれないからである。

一部の女性が男社会の論理を受け入れて成功しても、それが本当の意味で女性解放だとは限らない。むしろ、利潤追求にあくせくする業績主義社会のあり方を、女性問題の見地から問い直すことが求められるのではなかろうか。それは資本主義と近代合理主義を相対化し、さらには経済格差拡大とエコロジー危機が進行する現代社会の問題状況を解決するための重要な手がかりとなる。ただしそれはリベラル・フェミニズムの守備範囲を越える。

3.3.1.2. ラディカル・フェミニズムの革新性

「第二波」運動の主流をなすラディカル・フェミニズムの主張は、次のように要約される²²⁾。
①女性は男性により抑圧されている。そのことは、資本による労働者の搾取など、他のものに還元されてはならない。②ジェンダー秩序は、生物学的差異からの帰結ではなく、社会的に構築されたものである。「性役割の撲滅」は重要な政策目標である。③あらゆる政治的階級は男女の役割システムから発生し、合理化されている。それゆえすべての個人の自由は、性役割システムからの解放にかかっている。

このようにラディカル・フェミニズムは、男女差別の根本原因をジェンダー関係ないしは家父長制に求める点でリベラル・フェミニズムを越えているとともに、その解決の方策を階級闘争に還元しない点でマルクス主義とも一線を画す。

「個人的なことは政治的なことである」という有名なスローガンは、私的領域と公的領域という近代二元論パラダイムへの挑戦である。グループ討論を通して、女性たちが無意識のうちに抑圧していた様々な問題を意識化していく中で（コンシャスネス・レイジング）、最も個人的とみなされる性的な場にこそ、歴史的・構造的な男女の権力関係という政治的なものが貫通している、との認識に到達する。

こうして私的領域の問題が公共空間に持ち込まれると、実に多彩なテーマがフェミニズム運動の課題となる。そのひとつに、女性のセクシュアリティの解放がある。それが最もラディカルなかたちをとったのが、レズビアン・フェミニズム²⁴である。その主張によれば、「強制的異性愛」への告発とは、家父長制の下で男のために定義づけられてきた女のセクシュアリティの解放であり、すべての女性に共有される課題である。より日常生活に密着したところでは、強姦、レイプやセクシュアル・ハラスメントなどの性暴力の告発や、ポルノグラフィーに反対する運動などがある²⁵。

ラディカル・フェミニズムの限界についても、若干の考察を述べておこう。第一に、個人的なことの政治性を鋭く洞察したラディカル・フェミニズムだが、私的領域における問題を公共空間で再びテーマ化し、政治的・社会的な制度設計へと繋げる視点があったかどうか、問われよう。社会運動は、個人の生き方とともに、それを可能にしサポートする政策や制度にも関心をもつものだからである。アメリカの女性運動は個人としての女性の権利を拡大したが、家庭機能の制度的・経済的保障の面では、ヨーロッパのフェミニズムが獲得した成果に比べると低いレベルにとどまっており、社会的弱者には過酷な状況が今なお続いている²⁶。この国の政治文化や時代状況を考慮するとしても、アメリカのフェミニズムに個人主義的傾向が強いのは、ひとつの限界としてとらえられるべきだろう。

第二に、多様性の中の統一性をどう構築するかという難問がある。個々のグループの間に全体性志向がないわけではないが、女性であればわかり合えるというのは一種の擬制である。社会における立場や信条の違いゆえに、女性の利害は予定調和的とは限らない。事実、アメリカのフェミニズムは人種主義的バイアスを克服できなかったし、例えば男性との連携を承認するかどうか（分離主義）など、運動に亀裂を生じさせ得る要素はいくらかもある。多種多様な女性運動をひとつにまとめるのは困難との経験から、第三次フェミニズムとよばれる新しい潮流では、女性是这样あるべきという全般的回答を拒否し、「自分らしさ」を重視した運動を志向する²⁷。個別テーマごとの連帯も不可能ではないが、大規模なデモなどの集合行動は典型的な行動スタイルとはならず、社会運動の理解に変更を迫る可能性がある。

3.3.2. 現体制へのオルタナティブ

3.3.2.1. マルクス主義フェミニズムの理論的功績

マルクス主義フェミニズムは、家父長制・ジェンダー概念と、マルクス主義の諸概念とを統合し、資本主義体制における女性差別の重層的構造を把握・分析する。

とはいえ両者の協力は必ずしも順調ではなく、緊張をはらんだ関係は「不幸な結婚」になぞえられる⁸⁹。マルクス主義の労働価値説では「再生産労働」が十分に考慮されたとは言い難い。実践面でも、あらゆることが階級闘争に還元され、女性固有の要求には「ブルジョア的」という昔なつかしいレッテルが貼られることもあった。また現実の社会主義諸国の実状は、女性解放とはほど遠いものだった。

マルクス主義フェミニズムの理論的貢献はまず、家事労働の概念化に求められる。そもそも資本主義が成立する条件は、労働者と資本家への階級分化、および資本の本源的蓄積である。労働者は生産労働の対価として賃金を受け取るが、忘れてはならないのは、こうした関係が継続されるには労働力がとぎれることなく供給されねばならない、ということである。労働力の再生産活動としては、日常生活を維持する家事労働、新しい生命を形成する育児労働、弱体化した生命を蘇生させる看護労働、その他社会生活やコミュニティ活動などがある。伝統的に女性が担ってきたこれらの活動には、賃金は支払われない。

労働力の再生産は資本主義の存続のために不可欠にもかかわらず、所与として扱われてきた。こうした虚構が、新しい人間の生を作り出す能力を独占するのが女性であるという生物学的事実に直面したとき、女性の出産能力を国家的・男性的・資本主義的管理の下に取り込むためには、ある種の強制手段を必要とする。かくして女性たちは、財産や職業のみならず自らの思考に対する支配権や感情に至るまで、人間の本質を形成するすべてのものから引き離され、ただ出産・育児を行う機械のようなものとされた。「女性はその子宮から、直接的に分離されるかわりに社会的に分離された」⁹⁰（ヴェールホフ）のである。

ここで思い出されるのは、「家事労働に賃金を」というマリアローザ・ダラ・コスタの主張である。資本主義体制の下で女性が搾取されているという意味では、家事労働であれ家庭外労働であれ変わらない。このふたつの労働の双方に反対して闘うことが女性解放運動の目標であり⁹¹、そこから出産、母性、家事労働の拒否や、中絶、同性愛、売春の容認といった戦略⁹²が出てくるのである。こうした議論が荒削りなのは否めない。しかし個々の女性の生き方の問題が資本主義経済という全体系の中に位置づけられ、その変革が志向される。その意味で彼女もまた、「性差別主義や家父長制は後進性の徴しであるどころかむしろ産業体制とその蓄積モデルにおける中心的なイデオロギイ的・制度的基軸」⁹³（ミース）であることを喝破したマルクス主義フェミニズムの代表的理論家なのである。

マルクス主義フェミニズムが想定する主婦は、郊外住宅の退屈な中産階級女性のイメージとは似ても似つかない。夫の稼ぎだけで生きていける者はむしろ例外だからである。そのため家事労働に加え、劣悪な条件で賃労働に従事する主婦は少なくない。それはしばしばインフォーマル・セクターとよばれ、従来の経済学では周辺的な位置づけしかなされなかったが、資本主義の発展になくてはならないものである。第三世界的女性労働の実態をみると、その意味がはっきりしてくる⁹⁴。

ここにマルクス主義フェミニズムのもうひとつの理論的貢献を確認できる。インフォーマ

ル・セクターの意味を解き明かし、それを世界システム論的視角の中に統合した。それにより、例えば第三世界の女性の貧困の解決のために、多国籍企業の世界戦略を批判し自らのライフスタイルを問い直すことが、先進国の女性運動の実践的目標として導かれる。これは、リベラル・フェミニズムや単なる権利獲得運動としての女性運動からは想像もできない、壮大な社会変革のビジョンである。

ところで今日、先進国の男性労働者においてさえ「主婦化」が進行しているのではなかろうか。新自由主義を基調とするグローバル化経済の下で「フレキシビリティ」が求められ、男性フルタイム労働者を中心とする雇用形態は崩れつつある。パートタイムや就労の無権利状態は、まさに第三世界の女性を苦しめている搾取形態だが、「この状態は西洋諸国においても次第に標準になりつつある。第三世界はわたしたちのところまで押し寄せてきた。……もっとはっきり言えば、西洋経済は、「女性化」ないし「周辺化」、「自然化」、「主婦化」されるであろう、しかし、決してプロレタリア化されないであろう」⁹²。ヨーロッパの男性労働者をモデルとした既成左翼の解放ビジョンは、有効性を失いつつある。

マルクス主義フェミニズムの問題点について。まず第一に、この学派は大衆運動としての基盤が弱く、どちらかといえば理論先行型である。第二に、労働力の再生産としての家事労働を概念化した功績は大きいだが、その担い手がなぜ女性であるのかは必ずしも明確でない。出産は女性にしかできないが、育児や家事はそうではない。出産機能の延長上に女性の育児・家事労働の自明性を根拠づけるのは、保守派好みの議論である。不払い労働が女性にあてがわれてきたことの史的分析としては理解できるが、今後は別の方向性に進む可能性もあるのだからその展望がより深く考察されるべきではないか。それとの関連で筆者としては、西洋経済の「女性化」にメタファー以上の意味を読み込むことには慎重にならざるを得ない。第三に、現代の国際政治経済状況に関する論点の提示は興味深いが、問題解決のビジョン形成には至っていない。これは、世界システム論がまだ未完成の理論であることを示唆しており、今後の発展が望まれる。

3.3.2.2. エコ・フェミニズムの試み

エコ・フェミニズムは、種々の思想的起源をもつ新潮流だが、環境革命を先導するよう女性たちによびかけたフランソワーズ・ドゥボンヌにより命名されたといわれる。環境破壊の要因を、資本主義的家父長制と男性による女性の生殖能力の支配に求め、今日の経済システムや現代文明に対する強力な批判をなす。

エコ・フェミニズムは、文化派エコ・フェミニズムとソーシャル・エコフェミニズムとに大別できる⁹³。前者は、女神や月、動物、女性の再生産システムを中軸とした古代の儀式的復活を通じて女性と自然の関係を高く評価するスピリチュアリズム（霊性主義）の影響を受け、環境問題やその他の社会問題を「女性文化」で救済することを唱える。これに対しては、神秘主義的で反理性・反近代的との批判があろう。また女性と自然との関係を理想化する立場

からは、女性の本性は生命を生み育てることという「本質主義」が帰結する。女性を母役割に閉じこめる性役割分業は、フェミニズムが最も批判してきたところであり、その意味でエコ・フェミニズムは保守的な要素も内包しているのである⁹⁴。

これに対し後者は、資本主義的家父長制社会のヒエラルキーの打倒により、女性と自然の解放は実現すると主張する。この学派は、男性を文化、女性を自然と同一視することが女性と自然の征服を正当化してきたことを批判するが、文化派エコ・フェミニズムのように女性を理想化したりはしない。またリベラル・フェミニズムのように、女性と自然の関係を断ち切るという考えにも与しない。男性と女性、文化と自然といったヒエラルキー的二元論によるのではなく、両者の弁証法的関係性を重視する。

現体制へのラディカルな変革ビジョンという点で際立っているのはソーシャル・エコフェミニズムのほうである。そこでは人的・思想的に、マルクス主義フェミニズムとの親近性がみられる。メアリ・メラーは言う。「フェミニストは、人間の諸関係が性の差異と家父長制によって歪められてきた道筋を明らかにしてきた。緑派の人々は、人間社会と自然の誤った境界線を打破してきた。社会主義者は、経済関係における搾取の現実を暴露してきた。これらの境界線はたんに現実のうちに存在しているだけでなく、私たちの心の中にも存在しており、このふたつのレベルで向きあう必要がある」⁹⁵。彼女はこれらの運動を批判的に摂取し、エコ・フェミ社会主義の構築を試みる。

だがここに重要な問題がある。フェミニズムとエコロジーの協力関係はそれほど自明のことだろうか。答えは否である。名の知れた環境保護団体(グリーン・ピースやアース・ファースト!など)やエコロジー政党(西ドイツ・緑の党など)の幹部クラスが(白人)男性に偏っていることや、エコロジーの名の下の人権抑圧(先住民の生存権を無視した環境保護、結果として女性の犠牲の上に立つ人口コントロールなど)などは、フェミニストには到底受け入れ難い。エコロジストはしばしば、自らの思考や行動の根底に潜むジェンダー・バイアスに無関心だった。他方では、エコロジーに無頓着なフェミニズム運動も珍しくない。ともに現代社会の支配と搾取構造に批判的態度をとるフェミニズムとエコロジーだが、その協力関係を前提することはできない。

両者の統合という容易でない課題を引き受けるエコ・フェミニズムだが、その理論的・実践的試みが成功かどうかは今後判断されるべきことである。だがなぜエコ・フェミ社会主義が魅力的なのかについて、述べておこう。

メラーの議論の注目すべき点として、第一に、ミーの世界とウィーの世界の分裂への批判があげられる⁹⁶。彼女は、男性を中心とするパブリックな世界が、それを支えるケア責任、すなわち女性に強制された利他主義があることを無視していると批判し、それにウィーの世界を対置する。これは、近代西欧市民社会への問い直しであるとともに、あらゆる社会運動に共通する相互連帯の構築というテーマに通じるものである。

第二に、経済成長思考と業績主義を旨とする現代文明を批判する視点が含まれることであ

る。「人類の歴史は、どんどんペースをあげながら地球の生物学的・エコロジーのリズムから離れ去っていく過程と見ることができる。……わずかに数百年のうちに再生不可能なエネルギー資源の限界を超え、現在ではコンピュータのナノ秒（10億分の1秒）文化の中におり、キーひとうちは5億ナノ秒に等しい」⁶⁷。こうして現代社会の「ナノ文化に内在する狂気のハイスピード」に「持続可能性のスピード」が対置される。

メラーの議論の第三の特徴は、ポストマルクス主義の提起する根元的で複数的な民主主義⁶⁸へと近づく糸口が、萌芽的ではあれ示されていることである。ひとくちに新しい社会運動といっても、その目標やスタンスは多種多様である。多様性を認めつつ、民主主義的等価性の原理を通じて節合された集合的な政治的アイデンティティの構築が必要であり、これなくしてはある運動が特権的地位を要求したり、単なる権利獲得運動に終わってしまう。多元的価値観に立脚したオルタナティブ構築の試みが、ソーシャル・エコフェミニズムの中に表象をみているといえよう。「……必要なのは優先順位の転換なのだ。すなわち、男性から女性へ、金持ちから貧乏人へ、北から南へ、自然の搾取から自然のケアへ。だが、このどれひとつとして単独で実現されることはなく、私たち相互の結びつきというのが真実であって、これこそ、なぜエコ・フェミ社会主義が必要なのかの理由なのだ」⁶⁹。

3. 4. 日本フェミニズム運動に関する若干のメモ

日本フェミニズムは、単なる欧米思想の輸入ではなく、外国の影響を受けつつ日本社会の具体的問題に取り組んだ集成として理解されるべきである⁷⁰。すでに戦前から雑誌『青鞥』の伝統があり、与謝野晶子、平塚らいてう、山川菊江らによる母性保護論争⁷¹（1918～19年）もみられた。家制度をはじめとして伝統的に男尊女卑の風潮が強く、もちろん婦人参政権などなかった状況下での論争は注目し得る事実だが、日本フェミニズムの克服すべき弱点も内包していた。当初アナキスト的立場をとった高群逸枝はその後、自ら天皇制と戦時翼賛体制のイデオログに成り下がるが、これは過度の母性主義に立脚するフェミニズム思想の危うさを示している。他の論者にしても、封建的家制度の廃絶後の女性解放を展望する上で欠かせない国家権力の問題を、突き詰めて考えていたとは言い難い。

敗戦により日本はともあれ民主化され、男女平等は実現されたかにみえた。この間主婦論争⁷²などの注目すべき論争もあったが、日本フェミニズムの発展の転機となったのは、70年代のウーマンリブ運動⁷³だった。リブは、企業戦士であれ左翼活動家であれ男性を支える良妻賢母を理想とする、欺瞞的な戦後民主主義的女性像への全面的拒否から出発し⁷⁴、家庭、国家、母性を問い直すさまざまな運動を展開した。その後、リブ運動の経験を理論に高める試みがなされた。そこには、江原由美子によるラディカル・フェミニズム再興の仕事⁷⁵などが数えられる。一方青木やよひらエコ・フェミニストは、リブ運動の主流（と思われていたもの）に疑問を呈し⁷⁶、女性原理を再評価しつつ産業社会のあり方を問う視点を提示した。80年代

の日本フェミニズムの理論状況はおおよそ、マルクス主義フェミニズム、ラディカル・フェミニズム、エコ・フェミニズムの三つ巴と把握し得る。

ところで日本フェミニズムを語る際に避けて通れない論客は、上野千鶴子である。『家父長制と資本制』などによりマルクス主義フェミニズムを紹介し、理論的体系化の点で際立っていたが、同時に彼女は、メディアを通じたフェミニズムの大衆化の中で一躍有名になった時代の寵児でもある。大越愛子は、「彼女(上野)が標榜するマルクス主義フェミニズムは、日本資本主義批判を行わず、むしろ日本資本主義の繁栄によって成立した大衆消費社会の女性利用に便乗していくという、いかにも日本的な折衷主義的マル・フェミだった」⁴⁷⁾と手厳しい。ここで大越の批判が、マルクス主義フェミニストとしてなすべき理論的解明を怠った上野への批判であって、マルクス主義フェミニズムそのものへの批判ではないことに注目したい。体系化志向は多くのフェミニストが抱いているが、それが十分に果たされてないことへの苛立ちが見てとれよう。あるいは、歯止めなき資本主義の下で噴出する問題状況を尻目に、体制迎合的態度をとる「進歩的」知識人への批判ともいえる。

エコ・フェミニズムについてはどうか。大越は、自然破壊や第三世界の搾取に対する告発というこの学派の積極性を認めつつも、次のように言う。「エコ・フェミ論争の結果、日本のフェミニズムはエコ・フェミ的な問題との取り組みに対して熱意を喪失し、資本主義体制批判をネグレクトし始めた。先進工業国による第三世界の女性たちの生活破壊という問題に対しても無関心となり、バブル期を迎えた日本資本主義の中での女性戦略を追求する一国フェミニズムへと自閉していく、退行現象を示すことになったのである」⁴⁸⁾。この評価がもし妥当なものなら、非常に残念な言説状況と言わざるを得ない。

80年代から90年代にかけて世界的に新保守主義の嵐が吹き抜ける中、守勢を余儀なくされたのは日本フェミニズムとて例外でない。だからといって、日常の具体的問題への取り組みを放棄することはできない。そのひとつとして雇用や職場での男女平等があり、86年に公布された雇用機会均等法はひとつの山場となった。しかし企業側は、「総合職」と「一般職」のコース別人事により女性に仕事か家庭かの二者択一を迫り、男女の実質的平等は期待はずれとなった。ここから改めて浮かび上がってくるのは、男は仕事、女は家庭といった性役割分業、およびそうした家父長制的ジェンダー関係の上に成り立つ企業中心社会日本のあり方を根本的に問い直すことなしには問題解決はあり得ない、ということである⁴⁹⁾。その意味で注目すべき仕事は、大沢真理『企業中心社会を超えて』である。なお職場関係では、パート労働者の問題が依然大きなテーマであり、近年ではセクシャル・ハラスメントが注目を集めている。家庭領域に目を転じれば、ドメスティック・バイオレンス、夫婦別姓、結婚観の多様化、シングル・マザー問題など、枚挙にいとまがない。また性規範が開放的になりつつある今日、売買春をめぐる問題もフェミニズムの重要なテーマとなった。新しい問題も含めた学習テキストとしては、国立婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会編『女性学教育／学習ハンドブック』がある。社会福祉とフェミニズムの関係を扱った杉本貴代栄、比較研究を通じて家父長

制の意味を問い直した瀬地山角といったユニークな仕事も忘れられるべきでない。

90年代初頭、旧日本軍により従軍慰安婦とされた韓国などの女性たちが、日本政府に謝罪と国家補償を要求して立ち上がった。これはもっぱら政府の戦後処理の問題である、などと言うべきではない。民族差別や戦争責任はフェミニズム運動とも無関係ではなかったからである。国内や家庭内での女性差別には敏感だが外部世界の収奪には無関心というフェミニズムの弱点を、従軍慰安婦問題ははからずも明るみに出した。今日、「売春の国際化、公言はされないものの病人看護や老人介護は外国人労働者に頼ろうという議論など、性差別を国外へ順送りする傾向が明らかになっている」¹⁶⁾とすれば、由々しき事態である。一国フェミニズムを越えた連帯の構築は、現代フェミニズムの試金石である。

国境を越えたフェミニズム運動としては、1995年には第4回世界女性会議が北京で、そこで採択された行動綱領を検証する目的で「女性2000年会議」がニューヨークの国連本部で開かれている。この種の国際会議は、政府、NGOを問わず世界各地からの代表が一同に会する場として、国際政治のアジェンダに定着しつつある。第4回世界女性会議については、日本婦人団体連合会編『婦人白書1995』も特集を組んでいる。

注

- (1) 大越96, 34～36頁, および細谷97, 40～45頁を参照。19世紀のフェミニズム運動については、ギデンス97, 邦訳583～584頁, など参照。
- (2) 本稿では、Oberschall 97のフェミニズム運動に関する章(p. 325-338)を参照した。
- (3) NOW誕生の挿話はフリーダン63, 邦訳新版284頁参照。
- (4) この事例のわが国における紹介は、NHKスペシャル世紀を越えて「絆・ともに生きる③ウーマン・豊かな国の静かな革命」(NHK総合テレビ, 1999年10月24日放送)
- (5) 『現代フェミニズム思想事典』18頁, 杉本93, 183～187頁, など参照。
- (6) ギデンス97, 邦訳123頁
- (7) フロイト, 下巻389～396頁
- (8) フリーダン63, 邦訳新版82頁
- (9) イリイチはジェンダーを, 時間と場所に固有な男女の行動上の特性としてとらえ, ヴァナキュラーなジェンダーがセックスの優位にとって代わられる産業社会を批判する(『ジェンダー』, 邦訳2頁～)。『シャドウ・ワーク』もあわせて参照。
- (10) 金井97, 大越96, 79～90頁, など参照。
- (11) ミレット70, 邦訳71～72頁
- (12) ミッチェル71, 邦訳112～114頁
- (13) ボーヴォワール53, 邦訳決定版54～57頁
- (14) ファイアストーン70, 邦訳256頁
- (15) 大越96, 178頁
- (16) こうした対立は, 2000年6月の国連女性会議でもみられた。
- (17) 青木86, 増補版145頁
- (18) フリーダン63, 邦訳新版172頁
- (19) 鄭映恵97, 101頁
- (20) フリーダン63, 邦訳新版292頁

- (21) 『現代フェミニズム思想事典』298頁
- (22) これについての概説は、大越 96, 53～54頁, 富岡 97, 61～88頁, など参照。
- (23) 伊田 97, 30頁
- (24) 前掲書, 32頁
- (25) <http://caramia.g-net.org/emerging/01.whatis.html>
- (26) サージェント 81 所収のハイジ・ハートマンの論文（初出は 1979 年）を参照。
- (27) ミース／ヴェールホフ／ベンホルト＝トムゼン 88, 邦訳 65 頁
- (28) ダラ・コスタ 86, 邦訳 114 頁（論文発表は 1974 年）
- (29) 前掲書, 13 頁（論文発表は 1981 年）
- (30) ミース／ヴェールホフ／ベンホルト＝トムゼン 88, 邦訳 16 頁
- (31) 前掲書, 276 頁
- (32) 前掲書, 294 頁
- (33) 萩原 97, 299～300 頁, 『現代フェミニズム思想事典』90 頁
- (34) これはちょうど、ラディカルなエコ中心主義からしばしば保守的主張が導かれたのと類似している。前回の拙稿（『工学院大学共通課程研究論叢』37-2, 40 頁）参照。
- (35) メラー 92, 28 頁
- (36) 前掲書, 288～289 頁
- (37) 前掲書, 294 頁
- (38) 『工学院大学共通課程研究論叢』37-2, 所収の拙稿（44 頁）を参照。
- (39) メラー 92, 318 頁
- (40) 天野／井上／上野／江原編『日本のフェミニズム』（全 7 巻＋別冊 1）はこのような問題関心から編まれている。
- (41) 加野 97, 西川 97 など参照。
- (42) 上野千鶴子 82。他に池田 98 も参照。
- (43) その軌跡は溝口／佐伯／三木編『資料日本ウーマンリブ史』で読むことができる。
- (44) 大越 96, 128 頁
- (45) 江原 91, 46 頁
- (46) 青木 86, 増補版 191 頁
- (47) 大越 96, 140 頁。上野批判とその解釈については、江原 91, 1～35 頁も参照。
- (48) 大越 96, 139 頁
- (49) これは、前近代を利用して経済成長をとげる日本的近代への危惧, という江原由美子の問題関心（西川 97, 238 頁）とも通じるものである。
- (50) 西川 97, 242 頁

参考文献

- 天野正子／井上輝子／上野千鶴子／江原由美子編, 1994/95, 『日本のフェミニズム』（全 7 巻＋別冊, 岩波書店, ①『リブとフェミニズム』／②『フェミニズム理論』／③『性役割』／④『権力と労働』／⑤『母性』／⑥『セクシュアリティ』／⑦『表現とメディア』／別冊・『男性学』）
- アンダマール, ソニア／ロヴェル, テリー／ウォルコウイツ, キャロル, 1997, 『現代フェミニズム思想辞典』（奥田暁子監訳, 明石書店, 2000 年刊）
- 青木やよひ, 1986, 『フェミニズムとエコロジー』（新評論, 改訂版 1994）
- ボーヴォワール, シモーヌ・ド, 1953, 『第二の性』（全 2 巻）（第 1 巻：井上たか子／木村信子監訳, 第 2 巻：中嶋公子／加藤康子監訳, 新潮社, 決定版は 1997 年刊）
- ダラ・コスタ, マリアローザ, 1986, 『家事労働に賃金を』（伊田久美子／伊藤公雄訳, インパクト出版会）

- 江原由美子, 1991, 『ラディカル・フェミニズム再興』（勁草書房）
- 江原由美子／金井淑子編, 1997, 『フェミニズム』（新曜社）
- ファイアストーン, シュラミス, 1970, 『性の弁証法／女性解放革命の場合』（林弘子訳, 評論社, 1975年刊）
- フリーダン, ベティ, 1963, 『新しい女性の創造』（三浦富美子訳, 大和書房, 新版は1986年刊, 原題は *The Feminine Mystique*）
- フロイト, ジグムント, 『精神分析入門』（上／下）（高橋義孝／下坂幸三訳, 新潮文庫, 1999年改版）
- 古田睦美, 1997, 「マルクス主義フェミニズム／史的唯物論を再構築するフェミニズム」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- ギデンス, アンソニー, 1997, 『社会学（改訂第3版）』（松尾精文他訳, 而立書房, 1998年刊）
- 萩原なつ子, 1997, 「エコロジカル・フェミニズム」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 細谷実, 1997, 「リベラル・フェミニズム」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 伊田久美子, 1997, 「ラディカル・フェミニズム」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 池田祥子, 1998, 「社会運動を支える『男／女』論, 『性差』観／『女の経済的自立』『主婦』『母』, それぞれの批判と超克」（所収：フォーラム90s研究委員会編『20世紀の政治思想と社会運動』, 社会評論社）
- イリイチ, イヴァン, 1981, 『シャドウ・ワーク／生活のあり方を問う』（玉野井芳郎／栗原彬訳, 岩波書店, 1998年特装版刊）
- イリイチ, イヴァン, 1982, 『ジェンダー／男と女の世界』（玉野井芳郎訳, 岩波書店, 1998年特装版刊）
- 鄭暎恵, 1997, 「フェミニズムの中のレイシズム／〈フェミニズム〉は誰のものか」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 金井淑子, 1997, 「ポストモダン・フェミニズム」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 加野彩子, 1997, 「日本フェミニズム論争史①母性とセクシュアリティ」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 国立婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会編, 1997, 『女性学教育／学習ハンドブック／ジェンダー・フリーな社会をめざして』（有斐閣）
- メラー, メアリ, 1992, 『境界線を破る！／エコ・フェミ社会主義に向かって』（壽福真美／後藤浩子訳, 新評論, 1993年刊）
- ミース, マリア／ヴェールホフ, クラウディア／ベンホルト＝トムゼン, ヴェローニカ, 1988, 『世界システムと女性』（古田睦美／善本裕子訳, 藤原書店, 1995年刊, 原題は *Women: The Last Colony*）
- ミレット, ケイト, 1970, 『性の政治学』（藤枝滯子他訳, ドメス出版, 1985年刊）
- 溝口明代／佐伯洋子／三木草子編, 1994/5, 『資料日本ウーマンリブ史（全3巻）』（松香堂）
- ミッチェル, ジュリエット, 1971, 『女性論』（佐野健治訳, 合同出版, 1973年刊, 原題は *Women's Estate*）
- 日本婦人団体連合会編, 1995, 『婦人白書1995』（ほるぷ出版）
- 西川祐子, 1997, 「日本フェミニズム論争史②フェミニズムと国家」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- Oberschall, Anthony, 1997: *Social Movements: Ideologies, Interests and Identities*. New Brunswick (2nd paperback)
- 大越愛子, 1996, 『フェミニズム入門』（筑摩書房）
- 大沢真理, 1993, 『企業中心社会を超えて／現代日本を〈ジェンダー〉で読む』（時事通信社）
- サージェント, リディア編, 1981, 『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』（田中かず子訳, 勁草書房, 1991年刊, 原題は *Women and Revolution*）
- 瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制／ジェンダーの比較社会学』（勁草書房）
- 杉本貴代栄, 1993, 『福祉社会とフェミニズム』（勁草書房）
- 富岡明美, 1997, 「レズビアン・フェミニズム／現在の状況からその歴史的背景・理論展開を振り返る」（所収：江原／金井編『フェミニズム』）
- 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読む（Ⅰ／Ⅱ）』（勁草書房）
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制』（岩波書店）